



C.M.D - case V -

qedqed

登場人物

登場人物

うみっち

本名：海水 さより（うみみず さより）

性別：女性

趣味：推理小説を読む、リアル脱出ゲーム参加等のミステリー全般

出身：兵庫県（現在も両親と姉と実家暮らし）

在籍：北摂国立大学法学部法学科1回生

きんちゃん

本名：金行 秋（きんぎょう あき）

性別：女性

趣味：外国人への道案内

特技：言語を覚えること（英語、仏語、独語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、アラビア語等を操る）

出身：和歌山県（実家で父方の祖父母と暮らしている）

在籍：和歌山国立外国語大学総合国際学部国際関係学科1回生

うみっちとの関係：父親の仕事の関係で小学生時に兵庫に引っ越し、うみっちと知り合い親友になる。

わかやま駅に到着。きんちゃんが待っていてくれた。

「きんちゃ〜ん！」

私うみっちは、大学生になって初めてきんちゃんに会いに行った。

「うみっち！久し振り！！じゃあ、ここからバスでね。」

きんちゃんこと、金行秋（きんぎょう あき）とは彼女が小学1年生の時に、

和歌山から兵庫に引っ越してきてからの仲だから、もう12年ぐらいになるだろうか。

それから、高校まで同じ学校でともに過ごしたが、

この春からきんちゃんが実家のある和歌山の和歌山国立外国語大学に進学し、離れ離れになった

。

そして、大学が夏休みに入り、私は旅行がてらきんちゃんに会いに来た、というわけだ。

最後に会ってから4か月しか経っていないので、当然ながらあまり変わってはいなかった。

まあ、電話やメールで連絡は取りあってたしね。

「きんちゃん、こちらの生活には慣れた？」

「うん、小さい時に住んでたしね。それにこれまでも結構頻繁にこっちには遊びに来てたしね。

」

きんちゃんは父親の仕事の都合で神戸に来るまでの6年間、和歌山に住んでいた。

バスを降りて、きんちゃんの実家に歩いて向かう。

「お祖父ちゃんと、お祖母ちゃんと住んでるんだっけ？」

「うん、父方のね。ふたりとも喜んでくれたよ。私と住むことになって。」

こちらには1泊する予定で、私はきんちゃんの実家に泊めてもらうことになっている。

「やっぱり、嬉しいんだろうね。かわいい孫と暮らせるの。」

「うん、うみっちのことも歓迎してたよ。私の親友に久しぶりに会えるって、すごく楽しみにしてるの。」

「過度に期待していただいても困るけど・・・。」

「実はふたりともミステリーが好きなの。だから・・・。」

「そうだったんだ！それなら話すネタはいっぱいあるかも。」

「そうそう、事件の話いっぱい聞かせてよね。」

そうなのだ。私は大学に進学してから入学式事件を含めれば、この4か月ほどで5つの事件に巻き込まれ、解決してきたのだ。

「事件に好かれてるんだね〜。」

きんちゃんは、からかいながら言った。

私は苦笑しながら「冗談じゃないよ。友達も狙われたんだからさ。」

きんちゃんは私の肩をポンポンと軽く叩いて、

「ごめんごめん。やまっちとそらっちだっけ？大丈夫だったの？」

「うん。今日も来たがってただけどね、バイトとか研究とかで忙しいらしくて。」

「そうなんだ。会いたかったなあ」

そこへ、女性の外国人旅行者がスマホやらガイドブックやらを見ながら、

右往左往している場面に出くわした。どうやら道に迷っているらしい。

当然ながら、きんちゃんは声を掛ける。

きんちゃんは語学のスペシャリストなのだ。とにかく耳がいいのか、言語を覚えるのが早い。

中学・高校の時も英語の先生よりも発音が良く、

外国人の先生が研修で来た時も、先生以上に仲良く喋っていた。

しかも・・・

「何かお困りですか？」

きんちゃんは英語ではない言語で相手に話しかけた。

そう、きんちゃんが話せるのは英語だけではないのだ。

相手は自分自身が話す言語で話しかけられ安心したようだ。

「道に迷ってしまって・・・。」

「どこに行きたいのですか？」

「みかんホテルです。」

「それなら・・・。」と道順を示し、外国人は何度もお礼を言ってその場を立ち去った。

女性の後姿を見送りながら、私はきんちゃんに尋ねた。

「今のってアラビア語だよな？」

「うん。そうだよ。よく分かったね。」

「前にもこんなことあったからね。」

「うん。あれは・・・高校2年生の夏休みだったね。」

私たちの記憶はしばし、2年前のある夏の日へと移っていった。

その日、私は今回と同じようにきんちゃんの実家に泊まりに来ていた。

きんちゃんは長期休みになると、和歌山に両親と帰っていた。それに今回は私も同行したのだ。

何でもお祖父ちゃんとお祖母ちゃんが孫の親友と会ってみたい、言っていたので、

私に白羽の矢が立ったらしい。

その時もきんちゃんのお祖父ちゃんとお祖母ちゃんはとてもよくしてくれた。

そして、2人でどこかに遊びに行くことになり、バス停でベンチに座りながらバスを待っていた。

「きんちゃん、どこに行く？」

「みかん博物館が結構面白いよ。みかんジュースも飲めるし。あっ、でもその前に付き合っ

しいところがあるんだけど。」

「どこ？」

「和歌山国立外国語大学。今日、オープンキャンパスなんだ。」

「あ〜、きんちゃんの志望校だね。了解！」

「その大学はほんといろいろ学べるんだよね。アラビア語、ポルトガル語、他にも海外情勢ね。」

「そうなんだ。そういえば、きんちゃん今、その言語勉強中だよね？」

「うん、それもあって今日行きたいなって。」

「あっ、そういえば昨夜私が出した暗号問題解けた？」

「ううん、まだ。もう少し時間ちょうだい！」

「いいよ。自信作だし、簡単に解かれたら悲しいしね。」

私たちの前には綺麗な外国の女性がスーツを着た男性と一緒にベンチに座ってバスを待っていた。

しばらくして、1台のバスが入って来た。大学行きではないバスだ。

その男女はそのバスに乗るらしく、ベンチから立った。

その時、女性はベンチに1枚の紙を残していった。

ポケットから自然に落ちたようにも見えたけど、わざと落としたようにも見えた。

女性に寄り添っていた男性がその紙に気づき、

それを手に取ったんだけど、中身を見てすぐに捨ててしまい、バスに乗って行ってしまった。

私たちは少し興味をそそられ、それを拾った。紙には下記のことを書かれていた。

$X = V + V$

$L = V \times X$

$? = X - X - X - V - X - L$

んらいおいきあへをんんはえせおかつえべぜてけぐひあけわにおちすうえほみたばいれじ

るげつじつてきけぐみほゆちびえんをあんえかわぼにえみあつれく

5 5 4 p が 0 6 い 0 6 1 5 8 6 0 4 ん b f も

「暗号みたいだね。」ときんちゃん。

「そうじゃないかもしれないけど、私たちの乗るバスはまだまだだし、暇つぶしに推理勝負といきますか。」

「受けて立ちましょう。」

数分後、私はある程度の形は見えていた。

「?に入る文字は分かって、それを元に読んでみたんだけど、意味が通じないんだよね。」
暗号はめっぽう強い私だけど、何かうまくいかない。何か考え方が足りないのだろうか。
隣できんちゃんが微笑んでいる。もしかして……。

「私は分かったよ。ちょうど勉強中だからね！それより、早く警察に連絡した方がいいみたいだよ！！」

「えっ！？それって、どういうこと？」

1時間後、きんちゃんからの通報を受け、和歌山県警が女性を無事に保護した。女性は念のため、病院に運ばれたが、特に問題ないとのことだった。

警察への連絡を終えたきんちゃんに私は説明を求めた。

「どういうことなの？」

「うん、一から説明するね。」

「まず、これは暗号だと解釈して読み進めると、当然大事なキーは？に入る文字だよな？」

「うん。そこに入る文字は分かったよ。この式に書かれているV、X、Lはアラビア数字のことだよな？」

「そう。最初の式は $X = V + V$ だから、 $10 = 5 + 5$ で式は成立する。そして、次の式は $L = V \times X$ 。アラビア文字を前提に考えると、これも成立する。アラビア数字では、Lは50だからね。」

「だから、最後の式の？に入るのはV=5ってことでしょ？」

「うん。」

「そこまでは分かったんだよ。それで、おそらく文章の5文字目ずつを拾って読んでいくんじゃないかなって思って読んだんだよ。でも、意味をなさなくて。」

「その考え方で合っているよ。でもね、うみっち、実はアラビア語は右から左に読むんだよ。」

「えっ！？そうなの？」

「うん。私も今勉強してるから知ったんだけどね。きっとあの女性は日本語もある程度詳しいのだろうけど、暗号作成時はアラビア語を母国語としてるから、とっさに右から左に文章を書いたんだろうね。」

「じゃあ、右から左に文章を読むと・・・」

私は紙に書かれている文章を5文字ずつに分け、該当する文字に印を入れていった。

んらいおい きあへをん んはえせお かつえべぜ てけぐひあ けわにおち すうえほみ
たばいれじ
るげつじつ てきけぐみ ほゆちびえ んをあんえ かわぼにえ みあつれく
54 pが 06い06 15860 4んb fも

抜き出すと、

んきんかてけすた

るてほんかみ

5014

これを右から左に読むと、

たすけてかんきん

みかんほてる

4 1 0 5

よって、

助けて 監禁

みかんホテル

4 1 0 5

となる。

「なるほどね。最後の4 1 0 5はおそらく部屋番号ってわけね。」

「うん。でも、どうしてあの女性は私たちにこれを託したんだろう。あの時、わざと落とした感じがしたし。」

これには私は答えられる気がした。今日、唯一の見せ場だろう。

「おそらく、私たちが外国語大学に行くと言ったから言語に興味があると思ったからじゃないかな。そして、暗号の話もしたでしょ。彼女にしてみれば、横にいる男性に知られないように暗号という形で助けを求めた。実際、あの人は紙の中身を見たにも関わらず、意味のないものだと思い、捨ててしまったしね。だから、言語に興味を持ち、そして暗号を解いてくれそうな人に託そうと考えてたんじゃないかな。」

「なるほど・・・やっぱり、うみっちはすごいね！」

「何を仰いますやら。暗号を解いたのはきんちゃんですよ！」

「たまたまだよ。それより、オープンキャンパスに早く行こう！終わっちゃう！！」

「了解！」

あとで聞いた話では、彼女は優秀なプログラマーだったが、

上司のひどい仕打ちにより会社を辞めるつもりだった。

独立するつもりで自分ひとりで開発した大金になるであろうプログラムとともに。

しかし、それを会社が横取りしようとしていることに気付き、仕様書のある場所に隠し逃走。

会社は彼女を見つけ、ある場所を聞き出すために脅したが場所を吐かなかった。

そのため監禁して何とか吐かせようとした末の事件だった、と後にメディアで知った。

和歌山県でリフレッシュして、気持ちよく大学後期を迎えて数日後にその事件は起こった。

日本中を震撼させ、私の姉も巻き込まれた通称【円卓の容疑者事件】である。
ここから物語は大きく動き出すことになる。